

視察先別報告 インドネシア

【青年海外協力隊】 小学校教育隊員活動視察

概要

環境教育に積極的に取り組んでいる小学校に派遣され、校長や環境教育に熱心な教諭と協力して、日本の授業法の紹介や現地教授法の改善案の提案、教師勉強会の活性化に協力する。

- 1** 井上 佳奈子 マッチニ・パルー小学校は日本の都会の小学校と比較するとこぢんまりとした、緑があつて素敵な雰囲気の小学校だった。5年生の授業を見学させてもらうと、鈴木隊員はもちろん現地語で授業しているので詳しい内容は分からないのだが、はきはきした口調で児童の注意を引き付け、児童を指名して答えを発表させるなど参加型の活気あふれた授業を作り出していて、それは日本の小学校を彷彿とさせて懐かしく感じた。ただそんな授業づくりの裏には彼女の並々ならぬ苦労と努力があつたことを聞かせていただいた。現地の教員とぶつかりながらも協力して子供に授業中のルールを守らせたり、難しすぎる教材を改善し分かりやすく変えたりしたそうだ。言葉や文化がまるで違う場所で、一人奮闘して一つの小学校を「改革」しつつある彼女の姿に胸を打たれた。
- 2** 貴名 貴洋 インドネシアの小学校教育は、日本と異なる特徴が2点ある。①留年システム、②卒業時に課せられる全国学力テストである。義務教育でありながら留年が存在する教育システムは日本人には理解しがたいだろう。卒業時学力テストにより中学進学も序列化も図られるため、詰め込み式教育も致し方がない。「日本型教育方法」がインドネシアの教育現場でどの程度まで受容されているか興味深かった。
鈴木結依隊員が派遣されているマッチニ・パルー小学校の校長先生に話を伺った。現状では、低学年で学んだ知識が高学年まで定着していない。インドネシア人教員が知識を教え込み、鈴木隊員が日本型の教授法でその知識を深めるというスタイルにより、子供達の能力向上がテスト結果にも効果的に現れている。環境教育も熱心に導入しており、環境教育の全国コンテストで1位を獲得し、その後も継続して実践している。
熱意のあるマッチニ・パルー小学校の校長先生のリーダーシップは、子供達の学力向上にプラスの効果が見られるだろう。鈴木隊員の生き生きとした授業も見学し、インドネシアの未来の明るさを感じた。
- 3** 國司 まゆ こちらの小学校は都会の学校。PTAの方々揃いの緑の色鮮やかな民族衣装で出迎えて下さり、お菓子や食べ物を出して下さり、3児の母として長年PTAに関わっている身としては「お疲れ様ですっ」という感じ。もっともこちらのメンバーは私たちを出迎えた後、お互いの民族衣装姿をスマホ（スマホの普及率は日本以上！）で撮り合ったり、私たちが出していたおやつを食べている姿を写真に撮ったり、楽しんでいる雰囲気がほほえましかったです。授業は教科書が全く見当たらずノートしか児童のかばんに入っておらず、最初この国には教科書がないのかと思いました。でも鈴木隊員より、教科書は間違いが多く、難しすぎて当該学年に適さないため、使用されていないという説明を受け、日本の現状との違いを知らされました。日本の、無償でもらいながら1年限りで使い捨てにされる、カラーの教科書の現実と比べ考えさせられることが多かった。そうした状況にも負けず現地語を流暢に操りながら工夫した手作りの教材を使って笑顔で授業する鈴木隊員はとても魅力的でした。
- 4** 栗原 朋子 民族衣装を着た保護者が入り口で出迎えてくれあいさつを交わしたのち、5年生の算数の授業を見学。着任して約1年の鈴木隊員がインドネシア語で授業を行い、時々カウンターパートの先生が助けに入る。算数なので正解は1つしかないが、考えさせる授業を心がけているそうだ。子供たちが興味を持つよう学習教材も工夫されている。数字カードを使いテンポ良く足し算や掛け算の練習をしたり、お菓子の空き箱を使って立方体・直方体の分類と特徴について学んだりしていた。
インドネシアは多民族国家であるが、こちらの学校では民族文化を大切にしており、他の民族の文化、言語、歴史を学ぶ機会がある。多文化共生の意識が子供の頃から身に付くだろう。
日本の教育の良い点を現地に合ったやり方と組み合わせ、ベストな授業法を導きだそうとしている隊員と先生たち。しかし着任して3ヶ月は本当につらい時期だったようで、とにかくコミュニケーションを取り、2年後のプラスのイメージを持って乗り切ったそうだ。このような経験をした隊員が帰国後日本人に体験を共有する日が待ち遠しい。

Republic of Indonesia

5

佐藤 康仁

南スラウェシ州マカッサル市にて、青年海外協力隊・小学校教育隊員の鈴木結依さんが勤務するマツチニ・バルー小学校を訪問。マツチニ・バルー小学校はマカッサル市内にある都市部の小学校。子供達からは、日本語、インドネシア語、マカッサル語でのドラえもん歌で歓迎される。保護者からは民族衣装を着て歓迎される。このような大きな歓迎から、鈴木さんの学校内での期待、存在感が窺われた。鈴木さんが担当する授業を見学したあと、インタビューを実施した。インドネシアの小学校では、1コマの授業時間が長い(105分)、教科書を持っていない子供もいる、教材の質や量が十分でない、教員がやる気に欠けるなどの様々な課題がある。赴任当時は、物を投げつけられたり、他の教員からの理解がなかったりなどといった困難があったが、現在では、学校内で様々な提案を行い実行しており、鈴木さんをまねる教員も出てきているとのことである。鈴木さんには任期があるが、校長先生は「どうにかして留めたい」と言っていたことが印象的であった。

6

須磨 麻寿美

教育環境やシステム、制度の違いの中でも「子どもたちにベストの授業」を、と奮闘する鈴木隊員の姿が印象的だった。鈴木隊員と現地教諭で双方の良い点を学び教え合うなど、よい影響を与えている様子が伝わってきた。また、授業見学を通じ子ども達の人懐っこさや明るさと共にインドネシアの一般的な教育現場を垣間みることができた。隊員の活躍とは別に、国の教育姿勢について考えさせられた。難易度の高い教科書、1コマ105分と小学生には長い授業時間など、極一部のエリート層向けに教育基準が設けられている印象を受けたからだ。実際の所、児童の多くはその基準には達していない。教育の質を上げるだけでなく、教育の平均化やボトムアップも必要なようだった。

7

手塚 大二郎

私たちがマツチニ・バルー小学校を訪問した際、まず最初に、小学生達による歌の歓迎があった。笑顔で元気よく歌う姿を見ると、なるほど子供というもの、日本でもインドネシアでも本質は変わらないものだ、と感じた。本質が変わらないとしても、これから子供達を形成していく重要な要素である教育について考えると、日本とインドネシアの間には大きな隔りがある。日本の教育の良い部分を現地で取り入れようと力を尽くしているのが、ここに青年海外協力隊員として派遣されている鈴木さんだ。

小学校教育を変えると一口に言っても、問題は尽きない。教科書は誤植だらけの上、むやみに難解な問題や表現が使われており、とても小学生に理解できるものではない。そのような中で鈴木さんは、日本の教科書や自作の教材を用いて工夫をしてきた。当初は学級崩壊状態だったクラスも、子供達とのコミュニケーションを通して解決してきた。一方で、現地の先生達と積極的に関わりながら、教育改善への熱意を伝えていった。最初は意欲が低かった他の先生達も、徐々に鈴木さんの提案を受け入れ、協力してくれるようになったそうだ。

日本でさえ骨の折れる小学校教師という仕事。その日本よりはるかに厳しい現場で、しかも母国語の通じない中での活動。頭の下がる思いとともに、青年海外協力隊の活動の難しさをあらためて痛感した。

8

宮原 昌宏

インドネシアを訪れて印象的なのは“屈託のないすてきな笑顔の子供が街中にあふれている”こと。鈴木隊員の授業を見学させてもらったが、現地の教員とタッグを組んで進められている授業は、子供たちとの双方向のコミュニケーションを意識し、子供たちに興味を持たせ集中力をきらさないような工夫が随所に見られた素晴らしい内容だった。隊員に聞いた話によると、この状態になるまでの道のりは決して平坦なものではなく、“言葉の壁による子供たちとの距離”“他の教員との意識の格差”“教育行政のルールの違い”“一方通行的な教授方法や教科書”など、様々な障壁があったとのこと。

そんな中、インドネシアでは教育者として国内屈指の女性校長のもと、歯を食いしばって努力してきたことが鈴木隊員の晴れやかな笑顔、周囲の教員や子供たちとの関係性などから、大きな成果につながっていることが伺えた。「自分自身で子供たちのために、“こうしたい”という思いを持つこと、思いを持てば必ず乗り越えるべき壁が見えること、そしてその壁を乗り越えた時に大きな喜びを得ることができることを学んだ。もし日本に帰って教鞭をとる時がきたら、このことを活かしたい」と最後に語ってくれた。